

『ラブスクエア』

著：崎谷はるひ

ill：小嶋めばる

「あの、すみません。まだ手続き、かかりますか？」

「少々お待ちください、ん？」

言外に苛立ちを滲ませた征矢の変化に気づいた様子もないまま、受付の男は端末を叩く。そして裏書きの名前を見たとき、なぜか小さく声をあげた。

機械的な反応しか返さなかった男の声がめずらしく、ついこちらも訊ねてしまう。

「なにかありますか？ あ、やっぱそのカード、もう失効してたりする？」

「いや、そうじゃなく……征矢、克己？」

いきなり呼び捨てられて面食らったが、薄い唇が動き、低い声が自分の名前を紡ぐのに、どきりとする。うっかりと悪いくせが出てしまいそうときめきを覚えた。

(こんなダサイのに、なに考えてんだ俺!?)

理不尽な憤慨を感じた征矢は、必要以上に攻撃的な声を発し、目を尖らせた。

「そうだけど？ なに、なんか問題あんの？」

「いや、そうじゃなく……」

戸惑ったような声は、さきほどまでの色味のない音程とは違う。少しあまいような感じのそれは、やはり聞き覚えがあると征矢は思った。

「征矢克己、って、あの征矢か？」

「あの、ってなんだよ？」

しげしげとそのカードを見つめていた男は、はじめて顔をあげて立ちあがる。予想どおりひどく背が高かった。

(……あれ?)

またデジャブだ。けっして小さくはない征矢を楽々見おろすほどの身長差。この首の角度はめったに感じることはない。長い指で野暮な眼鏡をはずした彼は、なにかをたしかめるように、そして少し自信なさそうに眉根をよせた。

「いや、あの。覚えてないか？」

もっさりした前髪がかきあげられ、あらわれたきれいな薄茶色の目。じいっと見つめてくる眼鏡越しの目を見返したとき、征矢ははっと目を見開いた。

「あんた、もしかして」

目を細めたことでことさら不機嫌に見える表情に、いやというほど見覚えがあった。鋭角的な輪郭、少しだけ目尻のさがった切れ長の目、薄い唇——そっけない声。

そして立ちあがったことで、はらりと崩れたネクタイ。隠されていたネームプレートは、ちょうど征矢の目の高さにつきつけられた。

「——白倉あ!？」

「ばか、しっ！」

思わず大きな声を出してしまい、目の前の男——白倉繁孝<しらくらしげたか>にたしなめられた。あわてて自分の口を自分でふさぎ、薄笑いを浮かべてしまう。

「あ、ごめん」

「ごめんじゃないだろう、相変わらず声でかいな」

「うっせえよ」

あきれ顔の白倉もため息はついたものの、そこに浮かぶ表情は、さきほどまでの事務的なそれとはまるで異なるものだった。

「うっわ、ひさしぶりじゃん。髪、切ったんだ？」

「ああ、就職のときに」

「にしても、もうちょっとななんかなんないの？ その頭」

「このところ、床屋にいったないんだ」

高校時代、白倉は肩につきそうな長い髪を、うしろでひとつに縛っていた。といってもファッションに気を配ったわけではなく、単に不精で伸ばしっぱなしにしたら、こまめにカットするより結んでいるほうが楽だと気づいたから、らしい。

「相変わらずだな。もうちょっと身なりに気を遣えよ」

「はは。面倒くさくてな」

ほんの少し口の端をつりあげ、目元をゆるめるだけの笑いかたは変わっていない。そのことにほっとしながらも、あのころのように長くはない彼の髪や痩けた頬のラインに、すぎた時間をまざまざと感じさせられる。

つかかって、けんかしてばかりだったあのころ、目の前の男は頑固で強烈で、けっしてこんなおだやかな声を出したりはしなかった。

そして、なつかしげに語りかける自分の声のやわらかさにも、時間のもたらした変化を知る。

「知らなかったな、司書になってたなんて」

しみじみと言った征矢の台詞に、白倉は精悍な頬に微苦笑を浮かべて返した。

「まあ、そりゃ、会ってないからな」

「そっか。あんたの卒業以来だから、七年ぶりになるか」

知らなくても当然といえば当然だろう。ひとつ上の学年だった白倉が高校を卒業して以来、個人的に顔をあわせたこともない。征矢も自分の生活に忙しく、高校時代の友人らとは少しずつ疎遠になっていたため、噂さえも聞かなかった。

「しかし、こんなところで会うとはな。俺けっこうここ通ってたけど、あんた、いた？」

「いや。この四月から異動でここの勤務になったんだ」

「ああ、ちょうどそれくらいから来てねえや」

たまたま同じ部活だったというだけで、自分たちはさほど仲がよいわけではなかった。当時はむしろ反発しあい揉めてばかりで、相性は最悪だとまで感じていたのだ。

それでもいまこうして相対してみれば、そんな反発心さえも、気恥ずかしいような思い出としてしか感じられない。

(変な感じ)

くすぐったい感傷に口元をゆるめていた征矢は、背後からかかったひんやりした声に口をつぐんだ。

「——お静かに」

「あ、すみません」

私語を咎めるような咳払いまで聞こえ、白倉は焦った顔をする。

「怒られてやんの」

「うるさい。ちょっと待ってろ」

にやにやしながらか冷やかしてやると、わざとらしく顔をしかめた白倉が作業に戻る。少し乱暴な物言いは、あのころのように征矢を苛立たせることはなく、ただなつかしくすぐったさを残した。

「返却は二週間後までをお願いします」

「了解」

白倉は慣れた動作で端末を叩き、貸出票をプリントアウトすると、征矢へと差しだしながらこっそりと告げた。

「それと、さっきの本、返却されたら連絡する。登録されてる電話番号でいいんだろ」

小さくつけ足されたひとことに、個人的に連絡はしないと云ったくせにと征矢はこっそり笑った。それを口に出せば、この男のことだ、むっとして撤回してしまうだろう。

それとも少しはこなれたようだから、苦笑でも浮かべてみせるだろうか。

どちらでもかまわない気はしたが、せっかくのサービスをわざわざ断ることもあるまいと、征矢は礼だけを返した。

「ありがとう。じゃ、また」

「……電話するから」

曖昧な征矢の言葉に、念を押すように白倉は言った。その少しだけ強い語調は、なぜだか悪くない感じだった。

借りた本を脇に抱えて歩きだし、出口のあたりで振り返ると、意外なことに見送るような視線の白倉がいた。小さく手をあげ会釈すると、あちらも軽く首を曲げてみせる。やわらかな反応に俄然気をよくして、細い脚の歩みは軽やかになった。

「白倉が司書、ねえ」

思えば本が好きな男だった。この仕事を選んだのも当然のような気もする。

突然やってきたなつかしい思い出との再会に、くすくすという笑いが止まらないまま、照り返しの強いアスファルトのうえを歩いた。

本文 p20～26 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>